

どが入っている。この素晴らしい5.1ミックスはステイヴン・ウィルソンが手がけている。僕は聴くために彼の家に行ったよ。僕たちはファースト・アルバムには入っていないたくさんの楽曲を入れた。なぜなら当時のヴィニール盤には各面に20〜21分以上はいい音で入れられなかったからね。たとえば、〈レディトロン〉のような曲はもっと長い始まりと、もっと長い終わりがあったんだ。クレイジーなイーノがやったものでね。今はそのフル・ヴァージョンを聴

くことができるし、非常にいい音で聴ける。僕はそれを聴いて本当にゾクゾクしたよ。アルバムはかなりよくミックスされていると思ったよ。オリジナル・ミックスのヴィニール盤ではその自体にノスタルジックなサウンドがある。ファンであれば、このニュー・ヴァージョンは本当に気に入るはずだ」

「ステイヴン・ウィルソンはこの時期の他のアルバムでも素晴らしい仕事をしました。『そうだね。彼は本当に素晴らしい。彼の仕」

「フィル・マンザネラの3年ぶりの新作『ザ・サウンド・オブ・ブルー』の記憶は、ギター・インストゥルメンタルのアルバムとしては『プリミティブ・ギターズ』以来実に33年ぶりとなる作品だ。昨年はピンク・フロイドの新作『永遠(T O W A)』で話題となり、引き続き『イーノ・ギルモアのソロ作にも参加しているという彼を、ロキシー・ミュージックのギタリストと紹介することに対してはちょっと抵抗感がある今日この頃。とはいえ大好きなロキシーは彼にとってもファンにとっても切り離せないことは事実だ。」

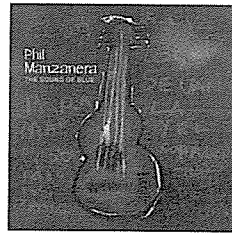
「ステイヴン・ウィルソンはロキシー・ミュージックの全アルバムをリミックスしているのですか?」

「そうだよ」

「それでは、今秋にはもう一度あなたと話す機会がありそうですね。」

「もちろんだよ!」

The Sound Of Blue



ヴィヴァイド / VSCD-4295 [SHM-CD,紙] / 2015.6.3

1. Magdalena / 2.1960 Caracas (featuring Sonia Bernardo) / 3.The Sound of Blue / 4.Rosemullion Head / 5.Halmstad / 6.Tramuntana / 7.High Atlas / 8.Mi Casa / 9.In Conversation with Andy MacKay / 10.No Church in The Wild (featuring Sonia Bernardo)

「ザ・サウンド・オブ・ブルー」の記憶は、ギター・インストゥルメンタルのアルバムとしては『プリミティブ・ギターズ』以来実に33年ぶりとなる作品だ。昨年はピンク・フロイドの新作『永遠(T O W A)』で話題となり、引き続き『イーノ・ギルモアのソロ作にも参加しているという彼を、ロキシー・ミュージックのギタリストと紹介することに対してはちょっと抵抗感がある今日この頃。とはいえ大好きなロキシーは彼にとってもファンにとっても切り離せないことは事実だ。」

けれども本作を聴く限り彼にとってはロキシーは過去のものであり、一人のソロ・アーティストとしての活動が彼の生活の中心になっていることは確かだ。日本のクルーエル・レコードの瀧見憲司氏が神田朋樹氏と組んだDJチームが参加したりと、何かと話題の本作ではあるが、間違いなく現在のフィルの音楽感を表している。同時に復刻された過去作品『ザ・ミュージック 1972』、2008(09年)『ダイヤモンド・ヘッド(75年)』『リッスン・ナウ(77年)』と聴き比べるのもいいかも。(岩本晃市郎)

デフ・スクール インタビュー DEAF SCHOOL

INTERVIEW

デフ・スクールが、オリジナル・アルバムとしては37年ぶりとなる新作『ランドレツド』を発表した。1978年に3作目『イングリッシュ・ボーイズ/ワーキング・ガールズ』を発表して解散。88年に同窓会ライブ・アルバム『セカンド・カミング』(このアルバムもこのたびリイシュー)を発表してからは、散発的な活動を続けてきた末のファン待望のアルバムだ。80年代以降はマッドネスやデヴィッド・ボウイ、エルヴィス・コストロらの作品を手がけるプロデューサーとしても活躍してきたクライヴ・ランガーに取材ができた。



「2015年にデフ・スクールの新作を聴くことができてうれしく思います。スタジオ録音の新作と、旧作からの楽曲のライブ録音でアルバムを構成するというアイデアは、誰の発案だったのでしょうか?」

「ニュー・アルバムを作るというアイデアの発端は、ハヤブサ・ランディングスからだった。その提案を受けて、僕とエンリコ(キャデラックE)、ステイヴ(リンゼイ)は話し合いの機会を持ち、アルバム制作の時間を作ることができるか、またクリエイティブイティにあふれた力強い作品を作ることができようかを話し合った。出発点にしたのは12年に作っていた4曲のデモ

だった。4曲を完成させ、それにステージでは演奏していたけれど録音はしていなかった楽曲をライブ・レコーディングして加え、それから僕たちが書けるだけの新曲をもう少し加えることにした。かなりきわどかったけどね(笑)」

「1枚のアルバムとしてすんなりと聴き通せるのですが、曲順を決めるのには時間がかかりましたか?」

「そうだな、僕たちは半分をきっちりライブ音源、というようなアルバムにはしなかった。スタジオ録音の楽曲との音質が全く違って聴こえてしまうからね。それで僕たちはレコーディングされた二つのタイプ

質問・構成 鈴木祐

の音源を混ぜ合わせることにした。洗濯機でソックスとパンツと一緒に洗われているみたいだね」

——スタジオ録音の新曲は、12年に制作されたものがベースですが、このレコーディングが開始されたきっかけは？

「えーと、僕は何曲か新曲を書いていて、半分以上はアイデアが出来上がっていて、それらの曲を親友のチャーリー・アンドリュースとブリクストンにある彼のスタジオでデモにした。でもその曲には、歌詞や新たな展開が必要だった。僕はエンリコたちと11年のEP『Enrico & Betta?』以来となるデフ・スクールの新曲を制作し始めた。僕は毎日曲を書いてきたから、アイデアのストックはたくさんあったからね」

——楽曲は、それぞれがレコーディングまでに準備していたものなのでしょうか？

「12年の録音にはすでにステイヴのベースが入っていた（新曲の中には、エンリコがステイヴのデモをベースにしたものもあった）し、その後キーボードのアイデアを加えるためにマックス（・ジョン・ウツ



Deaf School

ド）が入ったりした。ただ、12年の段階では完成までには至らなかった。結局14年末から15年の初めにかけて、レコーディングを再開したとき、ドラムのグレッグ・ブレデンやサックスのイアン・リッチー、それからもちろんベット・ブライトがヴォーカルと彼らのアイデアを加えてくれた」

——レコーディングは、メンバーが全員揃って行なわれたのですか？

「いや、ライヴ・トラックはもちろん全員一緒だけど、それ以外のスタジオ・トラックはそれぞれのメンバーが別々に自分たちのパートを吹き込んだ。グレッグは1回のクレイジーなセッションですべてのドラムを入れたよ。（Falkner & Hope）は15年に書いた唯一の完璧な新曲だね」

——録音時のメンバーそれぞれの役割は、どのようなものでしたか？

「僕とステイヴがスタジオで一番多くの作業を担当したかな。ビッグ・コンストと一緒にプロデュース作業をしたり、エンリコやベティ、イアン、グレッグが自分たちのパートを録るためにスタジオに入ったり

アプールのことを綴ったステイヴの素晴らしい詩を受け取ったとき、美しいメロディを書いたんだ。触発されたんだね」

——シングルB面曲の「Last Night」など凝った選択がなされていますが、ライヴ録音の楽曲の選択基準は？

「88年のライヴ・アルバム『セカンド・カミング』に入れなかった曲を選んだんだ」

——ボナス・トラックの「Should've Been Me」は88年のライヴからの音源ですが、これは故エリック・シャークさんに捧げるものでしょうか？

「すべての楽曲がエリックに捧げるものだよ。だけどこの曲は、彼が歌っていて88年のアルバムに入らなかったものだ。リーヴス・ガ

したからね。それから僕たちは、歌詞やメロディのアイデア、バック・ヴォーカルのアイデアを完成させるために、エンリコやベティに作業中のトラックをDropboxで送ったりもした。ロンドンで素早くレコーディングして、ベティやエンリコが2日かけて自分たちのヴォーカル部分を録ったんだ。僕たちにとっては、これまでとは違ったり方だったけど、エキサイティングでクリエイティブなものだったよ」

——この時の録音が6曲だったのは、どのような理由からだったのでしょうか？

「それが、僕たちが持っていたすべてだったからさ。それ以上は新しい曲を書く時間も、レコーディングする時間も、ミックスする時間もなかった。まだいくつか新しい曲のアイデアはあったんだけどね。僕たちは15年の2月中にはハヤブサ・ランディングスにアルバムを届けなければならなかったんだ」

——「Falkner & Hope」は、いつごろ制作されたものでしょうか？

「2015年の1月だよ。エンリコは、リヴ

ブレルスの素晴らしいギターが入っている」

——「Should've Been Me」を聴き終えてしばらくすると、クレジットされていない別の楽曲が始まったので驚いたのですが、この曲は？

「それは（In The Future）さ。マックスと78年のバンドで作った未完成の曲だよ。僕たちが見つけたカセットテープから収録したんだ。僕たちはレコーディング途中で放り出したこの曲のことを、すっかり忘れていた。これはこれで楽しいものだと思うようになったので、こっそり収めておくことにしたんだよ」

——グループが活動を開始して40年近く経ちますが、デビューした頃には40年後も同じメンバーでステージに立つ姿は想像できましたか？

「全然。全く想像していなかった。だけど僕たちがデフ・スクールとして演奏を再開したとき、それまで別々にやっていたとは思えなかった。びったりと元の位置に戻ったみたいだったよ」

——あなた自身は40年後の自分をどう思いましたか？

「自分たちがまたここでうまくやっているのに驚いているよ」

— アルバムのカヴァー・フォトはステイヴ・アレンさんが撮影していますが、メンバーそれぞれが箱の中でポーズをとるというアイデアも彼のものですか？

「そう、ジャケットとしてこの写真を使うというのはステイヴのアイデアだ。僕たちは、アルバム用にライヴ・レコーディングするためのヴェニューのバックステージにある楽屋にいた。そこでワードローブとして使っていた箱のようなコンバートメントの一つに座りながら、彼と話していたんだ。彼はこのシチュエーションでいい写真が撮れるって考えてたんだ。それが同じセットでデフ・スクールのメンバーも全員を撮るといってジャケットに結びついたんだ」

— フォト・セッションはいつごろ行なわれたのでしょうか。

「14年の12月、リヴァプール近くのニュー・ブライトンで撮った」

— 撮影は楽しいものでしたか？

「ああ、とてもおびおびとしたものだった

— ターズのツアーに行ったりしているよ。グレッグは、父親になったばかりだ。僕らのバンドでドラムを叩いている。僕は自分のバンド、クライヴ・ランガー&ザ・クラウン・グループというバンドをやっている。ロキシー・ミュージックのアンディ・マッケイもメンバーなんだ。イギリスのドミノ・レコードからレコードをリリースしているの、興味があれば聴いてみてほしいね。マックスもクラウン・グループにいるよ」

よ」

— 近年は、楽曲単位のネット配信が定着し、アルバムというスタイルのパッケージ・ソフトの立場は微妙になっている部分もあるのですが、デフ・スクールとしては、アルバムというスタイルへのこだわりはありますか？

「僕たちはLPサイズのアルバム・カヴァーが好きだし、アートワークのアイデアを考えたり制作するのも大好きなんだ。CDサイズのカヴァーは、2番目に好きなものだね(笑)」

— というのは、今回のアルバムを聴き終えたときに時間を越えた楽曲たちによって綴られた物語に、一本の映画を見たときのような満足感、充足感が感じられたからなのですが……

「ああ。もちろんそこには僕たちがLPを通じて音楽を発見し、育ってきた結果が反映されているんだろうね。音楽を聴きながら歌詞を読む。アートワークや、さまざまなかレジットから、アーティストについて多くのことを知る。僕たちは、そういうことをしてきたし、そうやって音楽に触れるのが好きなんだ。Spotify(欧米中心に展開

する音楽配信サービス)以前には、僕たちはバンドのどんな小さな情報でも見逃さないようにして、そこからより多くのことを発見できた。リスナーはアーティストにもっと近かったように思えるね」

— メンバーそれぞれの、デフ・スクール以外の活動について近況を教えてください。

「エンリコは、今もヴァネッサ・コントレイ・キノント、ヴァネッサ・アンド・ジ・オズのマネージメントをしている。ステイヴは、音楽出版の仕事をしていた、デフ・スクールの新しい曲の出版管理も彼が担当しているよ。それに、バンドのヴィデオ・クリップ制作も彼が担当している。ペットはマッドネスのサググスと結婚して、イタリアの家で多くの時間を過ごしている。オリヴの栽培をしているらしいし、旅行にも多く行っているみたいだね。イアンは、ザ・ソーホー・プロジェクトという自分のジャズ・プロジェクトとツアーをしている。彼はブラハにいたことが多くみたいんだけど、今年は何のところにいたな。テレビや映画の音楽を作ったり、ロジャー・ウォ

ときどきステイヴもね。だからこのバンドは現在のデフ・スクールの中身とっていいのかもしれないね。マックスは、自分のアート・プロジェクトで世界中を回って講義もしているよ」

— デフ・スクールの今後の予定として、現在決まっているものがあれば教えてください。

「今年の終わりでまでもっとライヴをやるよ。そして、また日本に戻りたいと思っているよ」

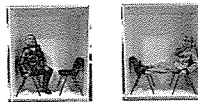
— 今後も、デフ・スクールとしての活動は継続し、新作も発表されると期待しているのでしょうか？

「まだ具体的なスケジュールなどは何も考えていないけど、アイデアが浮かんだら、新しい音楽や新たな詩を書くことは続けている。そうしたら、何だって可能になるさ。ひよっとしたら、舞台用のミュージカルを書くかもしれないさ。未来は誰にもわからないよ(笑)」

Laundrette

DEAF SCHOOL

LAUNDRETTE



Haybusa Landing / Lost House Archive Club / HYCA-3048 / 2015.5.27

1.Last Night / 2.Broken Down Aristocrats / 3.Laundrette / 4.Get Set Ready Go / 5.Geraldine / 6.Where's The Weekend / 7.Don't Open The Door Bette / 8.Liverpool 8 / 9.Darling / 10.Places & Things / 11.All Queued Up / 12.Folkner & Hope
bonus track
13.It Should Been Me

記事の冒頭にも書いたように、デフ・スクールのオリジナル・アルバムとしては37年ぶりとなる作品だ。10年のシングル、11年のEPリリースというステップはあったものの、こうしてフル・アルバムが届けられた(しかも日本からのオフ・アード)ことは、ファンには信じられない出来事であるに違いない。インタヴューにもあるように、作品全体が故人となつたエリック・シャーク、ティム・ウイタカー、ロイ・ホルトというバンド・メンバーたちに捧げられている。収録の13トラック(十一)は、7トラックのスタ

ジオ録音と8トラックの新録音ライヴ、そしてボーナスとしてトラック(十一)のライヴ・アーカイブ音源を収録。ライヴ音源は14年12月に本作のために録音されたものだ。新曲の6トラックについては12年にデモ録音されたものがベースの5曲と、14年の完全な新曲1曲となっている。すべてのトラックに現在進行形の現役バンドとしてのパワーが漲っているのが魅力であり、凝った構成と展開に「これってプログレ？」と思うほどアイデアが詰め込まれていたりするのだ。まずは聴くしかない快作だ。(鈴木 祐)